

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.92 2021年8月22日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

第39回かわさき演劇まつり

2020年7月開催予定だったかわさき演劇まつり「冒険者たち ガンバと15ひきの仲間」は、新型コロナウイルス蔓延の影響で延期されていましたが、1年遅れで、感染対策をとった上での稽古を重ね、7月31日と8月1日に公演の開催を実現することができました。出演、観劇、企画・運営された方々に、感想を寄せていただきました。

「生きている限り 戦い続ける！」

片柳 あおば

こんにちは、片柳あおばです。今回の演劇まつりはダブルキャストで、忠太と倉ネズミを（港ネズミも）やりました。

小学2年生の冬にオーディションがあり、3年生から稽古が始まる予定でした。週4回、稽古の予定が書いてあったので、ぼくは演劇をやりたいので習い事を減らしたのですが、稽古も演劇もやることができませんでした。

コロナです。

生きる希望を失いました。もう、死にたいと思いました。

つらいとき、NHKで「演劇のともじびは消さない」という番組をやっていて、それを見て沢山泣きました。

そしてその後、ぼくは動画を撮り、母さんのFacebookに出してもらい、護柔さんがシェアしてくれ思いを伝えました。

「僕は、演劇の文化を残したいと思っています。ほかの人にも伝えたいと思っています。」

なぜかという、こんなに人を笑顔にして楽しませる職業は、これだけかもしれません。

コロナでその文化が消えてしまうなんてもったいないです。とても僕はイヤです。自分の夢でもあるし。大人になっても続けたいし。みんなに笑顔を届けたい！ だからです。

僕は、演劇のともじびが消えないように頑張ろうと思っています。

演劇とは人を笑顔にして 元気にする 特別な職業である！

僕はとても演劇のことが好きです。演劇で人を笑顔にしたい！ そう思って続けています。

ほかの人に笑顔を届けることが僕の夢です。」(2020年7月)

公演が1年延期になり、コロナがなくなって思い切り稽古ができると思っていたのに、それは本番まで来ませんでした。

1年前の暑い夏「冒険者たち」のダンス動画の撮影があり、ダンスが苦手な僕はとても苦労しました。修業が必要と思い、演劇の稽古が始まった4年生からダンスを習い始め、少し自信が持て稽古が楽しくなりました。



写真撮影©胸ヶ嶺正人 以下同





配役発表で、忠太がぼくと白羽になり、大人のうまい人がやると思っていたから本当に驚いて、声が出ず、返事ができませんでした。

「ガンバってやるしかない！」とあらためて「冒険者たち」の本を読んで忠太の研究をしたり、休みの日は、立ち稽古の動画をパソコンで流して台本を見ないで言う練習もして、弟と妹もセリフを覚えてしまいました。

家から稽古場まで徒歩とバスで1時間くらいですが、1人で行って暗い中を帰って来たり、1年生の頃のぼくからちょっと成長したと思います。けれど、港組の稽古中に遊んで大谷さんに怒られました。全然怒らない大谷さんが怒ったのでかなりヤバイと思いました。話を聞いてなくて怒られる所は、残念ながら全く変わりませんでした。家でも母さんに怒られました。落ち込みました。

小屋入りして、場当たり、ゲネプロ、本番と楽しい時間を過ごして「演劇はやっぱりいいな」「大好きだな」と思いました。3年前はあまり気付かせませんでした。キャストだけではお芝居は成り立たず、色んな人が支えてくれ、コロナ禍で観に来てくれるお客さんもいてこそ楽しくお芝居が出来るんだとわかりました。「冒険者たち」に関わる全ての人に感謝しています。ありがとうございました。

「生きている限り 戦い続ける！」

ぼくは、もっと進化します。



我が家は当分ガンバ一色

片柳 麻友美

上記のように、「演劇について」語り出すとキリがないあおば、4年生になり、中身も成長しました。いつも元気いっぱいに見えるあおばですが、実はとても繊細で、人一倍敏感。前回の演劇まつりの頃は学校が上手くいって自己肯定感を持てている時でしたが、1年後の冬、ちょうど京浜の「死神」公演の頃、学校のことを考えると食事水分も喉を通らず、登校出来なくなり、「酒屋の小僧」さんでいる時間以外は死んだような目をしていました。



学校では、先生と女子と上手くいかず、自分の意見やアイデアが否定され、特に女子からは存在しないものとして扱われ、「死にたい」と言っていたあおば。「冒険者たち」のオーディションで生き生きとした息子を見て、ほっとしたのを覚えています。

「言われたこと以外はやらない」「誰かに確認してから行動する」

本来は想像力豊かで、誰も思いつかないことや気付かない視点を持った子なのですが、「いかに学校で上手くやるか」あおばはとても悩んでいました。

自分で考え行動することに不安があるあおばが、まず「自分で考える」この稽古期間を過ごすことで、徐々にまわりが見えるようになり、1人で稽古に通い自信がつき、ひと回り成長出来たと感じています。感謝でいっぱいです。さあ、これで次回からは息子を遠くから見守れると思っていたら、「わたしも演劇やりたい！」と末娘。港組、島組の両方見て「冒険者たち」の世界にハマったようで、ずっと歌ってひとり芝居をしています。我が家は当分ガンバ一色になりそうです。

(あおばの母)

次も一緒に参加しようと約束

原島 白羽

今回、かわさき演劇まつりに参加して最初は少し緊張してましたが、すごく楽しかったです。ちょうど年の近いあおばがいたので仲良くしていました。次も一緒に参加しようと約束しました。

私は演劇をやるのが初めてだったのですが、大谷さん達がたくさんアドバイスを下さり、すごくありがたかったです。

忠太役はセリフが多く、1人歌いもあつたりで大変でしたが良い経験になりました。

ありがとうございました。



最大限の努力をしての公演

山口 佐和子

初日を拝見しました。

まずは舞台上の大きな円形の装置。ぼんやりと明かりが当たっていて、大きさも勾配のある円形、そして存在感があり、あれは一つずつ分解できてバラバラの場所に散りばめられるのかな？ 等想像しながら開演を待ちました。

オープニング、その装置上に役者が揃っての歌。やはり勾配があるので役者の顔がバランスよく見え、歌も迫力がありこの先の冒険を楽しみに聴きました。

しかしながら、始まってすぐ気になったのは、とにかくセリフが聞き取れない。元気なのは良いけれど早口でセリフが流れてしまい、何を話しているのかわかりませんでした。稽古場では十分な声量、スピードだったのかもしれませんが、劇場に入ってから稽古で気をつけなければいけなかったのではないのでしょうか。知っていたストーリーなので、内容は分かっていた



たけれど、聞こえないことがかなりのストレス。

また名前にもあるように、それぞれがキャラクター付けされていて、それをどう表現するかも楽しみにしていたのですが、声色を変えたり、巻き舌にしたり、いつも慌てているように首を振って話したりしているだけで表現しようとしている為さらに聞こえづらかったです。もう一つ気になったのは衣装。ほぼ全員がグレー、茶、等の暗い色で、装置の色とも被ってしまっていました。ネズミ=汚い色という概念でやらず、それぞれの個性を活かした衣装でその役を楽しんでほしかったです。

そして圧倒的に足りなかったのはイタチ、特にノロイへの恐怖感です。海を渡ることへの恐怖、島という周りが海に囲まれた逃げられない場所での戦い、ネズミを簡単に殺せる、怪しげな催眠術のようなものを使う白いイタチ、それらに向かっていくネズミたちからは恐怖心や危機感が感じられなかった為、ノロイやイタチも大したことない悪役と見えてしまいました。

舞台上でネズミたちよりも巨大な美しい白いイタチを表現するのは難しかったかもしれませんが一番の見どころの一つだったので残念です。個人的には1人だけ異質な衣装を着ていたノロイは楽しく拝見し、もっとゴージャスでも良かったかもしれないとか女性がやっても面白かったなと思います。

ネズミたちの絆や命をかけて運命を共にする姿が薄





く、急に出てきた恋愛話や仲間の死に関しても迫るものがなく、この芝居で伝えたかったことが最後まで伝わらず残念です。

とは言え、この状況の中、できる限りの稽古をし、舞台を作りあげたのだろうなということは分かります。役者さん、照明さん、音響さん、装置の方々はもちろん、受付、場内整理の方々等、多くの方がこのコロナ禍で、観客に安心して楽しんでもらえるよう最大限の努力をしての公演だったと感じました。

若い子から年配の役者さんまで、揃って舞台に立ち、芝居を楽しむ演劇まつりが好きなので、これからも変わらずに続くことを願います。

演劇の冒険人生は今後も

矢崎 ちえ

7月31日、8月1日「冒険者たち～ガンバと15ひきの仲間～」を公演し、その舞台に立つことができました。

私にとって本格的な演劇は小学生以来で30年ぶり。舞台の上手も下手も分かりませんでした。2019年の冬、人生は一度きり、何か新しい事にチャレンジしようと考えていた矢先「かわさき演劇まつり」の存在を知り、興味津々応募したのが締切1時間前。春の稽古



の待ち遠しさとワクワクとは裏腹に、世界はコロナという見えない強敵との戦いが始まりました。

多くの舞台が中止に追い込まれる中、稽古開始はいつなのか、公演の目処は立たないものか、一度も会えない仲間たちは何をしているのだろうか、届いた台本を片手に悶々と考える日々が続きました。そして5月上旬、劇団発行のガンバ新聞に「1年延期」の文字が飛び込んできました。

延期なのだから中止ではない。プラスに考え、1年間は年をとらずに過ごそうと、体調に気をつける夏→秋→冬。

2021年2月、リモートで台本読み開始。冒険する仲間たちとオンライン上で顔を合わせ心が踊ります。そして3月、スペース京浜に全員集合。10代から70代まで世代も職業も異なりますが、一つの舞台を作り上げるというやる気に満ちていました。



稽古場は感染対策の下、終始熱いエネルギーに包まれていました。演技の一つひとつは同じではなくて、イメージがあって絶えず形を変えて生み出されるものだと思いました。演出の先生から「指示待ち症候群になるな」「想像しろ」「セリフをしっかり頭に入れて」「リズムが違う」と檄が飛ぶ度にできない自分が悔しくて、主役のガンバ2人や周りの動きを観察して真似て、自分の役が生き続ける術を暗中模索。こんな風になると、大変な稽古場かと思うかもしれませんが、先生のジョークやユーモアある仲間と過ごす時間はいつもあっという間に過ぎ、辛いと思ったことは一度もありません。

また大道具作りや衣装合わせ、宣伝活動も演劇祭の実現に向けて実感が湧きました。全てが初めてで、新鮮で、何と楽しかったことでしょう。

本番3日前に、初めて全員マスクを外すことができ、皆の本当の顔を知りました。

迎えた公演では、ステージ上から客席に座る子どもたちが目を大きく開き一緒に冒険の旅をしている姿を

見ました。ノロイという悪役登場に泣き出す子どもの声も聞こえました。仲間が命を落とすシーンでは15匹として悲しみとイタチへの憎悪が湧きました。私の本業は留学生に日本語を教える教師ですが、観劇にきた留学生たちが「日本の新劇を初めて見た、物語の世界に入り込んでしまった」と沢山の感想を寄せてくれました。

コロナ禍の中、緊急事態宣言の中、上演できたことは奇跡に近いと思います。本公演は多くの方の協力や支えで実現し、感謝の気持ちでいっぱいです。終幕しネズミの冒険人生は終わりましたが、演劇の冒険人生は今後も続けていこうと思ったのは言うまでもありません。



かわさき演劇まつり「冒険者たち」を観て思ったこと

藤田 るみ

まず、はじめに、このコロナ禍において1年の延期を決断し、今回無事に観客を入れて上演ができたことに対して、心からの賛辞を贈りたい。これだけ大人数で稽古を進めるのは相当な苦労があったと思う。

一般市民が参加して作られる舞台には、プロには出せない魅力があると思っている。様々な人生を送っている人が集まってみんなで一つの事を目標にひたむきに頑張る姿、情熱が溢れ出しこちらまで元気になるような。何より楽しそうな人を見るのは気持ちのいいものだ。多少、形が整っていないなくても、そのほうが、1人ひとりの個性を感じられてうれしくなる。

しかし残念ながら今回の「冒険者たち」からはその1人ひとりの個性や魅力が感じられなかった。

特に群衆シーンでは皆が何かにおびえていて、常にまわりと同調しようと必死になっているように見て取れた。意味も解らず怒られて手も足も出せなくなっている子どものような。芝居の経験が少ない人ほど与え



られた型からはみ出さないようにすることを一番の目標にしてしまう。

演出自身も間というものにおびえていたように思える。劇中にはほとんど間がなかった。

場面の変わり目、大きなドラマが展開された後、観客にとっては心を整理するためにも余韻に浸るためにも間が必要だ。

言うまでもないが、ゆっくり＝テンポが悪い。早い＝テンポが良いということではない。台詞においても全体に急かされているようだったが、あの劇場では致命的だ。会話は多少聞き取れなくても脳内で補填されるものだが、ベテラン勢を除き、一番大切にしたい心の交流、演技の軸となる動機、発見、リアクションのサイクルが成立していなかったために、重要な台詞が届かず想像ができない。登場人物が多い場合のミザンスのつけ方の甘さも相まって一体どこで何が起きているのかわからない。ガンバ2人は澁澁と流暢に立ち回っていたが、リアクションだけを何度も素振り練習して精度をあげてきたような演技に見えた。それぞれが壁打ちで打ち合いにならない。形が整っていることより、今みんなの眼下にどんな景色が見えて、どんなことに心を動かされているのかが知りたかった。

立派な装置ときれいな照明だが、舞台美術の抽象化には観客が読み解くための記号が必要でそれも伝わらない。向こうの島のイタチ、空上のオオミズナギドリのシーンがほぼ同じフォーメーションというのも熟慮





された結果なのか。ネズミの衣裳もそれぞれのキャラクターが埋もれてしまい、島のネズミに至っては普段着の人間が出てきてしまったように見てはいけなような気持ちにすらなった。これは予算、手間の問題ではない。イメージの共有と、キャラクターへの愛情があらわれるのだ。

今回の演出で粗削りだが魅力的であったら個性は平らにされ、画一的に味のないものにされてしまったように思える。演劇まつりと「冒険者たち」が持つ最大の魅力、色々な個性のある仲間たちが持てる力を合わせ工夫して苦難をのりこえるというものと離れる形の舞台になってしまったと言わざるを得ない。

コロナ禍での冒険を終えて

素敵な仲間たちとの出会いに感謝

柳沢 芳信

冒険者たちをやりたいと思い始めたのは、もう何年前でしょうか。

多分20年はたっているかと思います。

杉本台本と小田台本とあり、どちらをやるかという議論はともかく、どうすればそれだけの役者を集め、誰が演出できるかなど、とても大きな壁が立ちました。かっているように思えました。



しかし、この数年、「ブンナよ木からおりてこい」や「注文の多いどんぐりと山猫と料理店」の取り組みを通して、劇団自体が小粒にはなっても、十分な時間をかけてしっかり取り組めば大きな仕事も実現できるのではないかと考えるようになりました。

そこで、「どんぐり……」が終わった年の内に「2年後の作品を決めよう」と提起し、「冒険者たち」を候補として決め、演出には「劇団企て」小山さんからの推薦で劇団わが町の演出助手で川崎とも縁のある大谷賢治郎さんに当たることとなりました。翌年2月に劇団わが町の公演の後、お会いして相談したところ、「冒険者たち」が演劇を志したきっかけとなった作品であり、是非ともやらせてほしい、と快諾を得ることができました。

以後、翌年の演劇講座も大谷演出の講師で行い、12月にはオーディションを行って50人を超えるキャスト



トが集まり順風満帆のスタートを切ることができました。

脚本は、既存の作品を使うのではなく、大谷演出自身が脚色し、講師を務める桐朋学園でまず上演してみようという念の入れよう。早く動き出したからこそその出来事です。

そして、2020年4月、稽古を始めようとした矢先に、コロナ感染拡大により緊急事態宣言が発せられ、稽古を始められず、一度も一堂に会することなく延期ということになりました。以後の経過はご承知の通りです。

本年4月に稽古が始まってからも、職場の事情等で、辞退者が続き、舞台監督はコロナで他の日程がずれて辞退となりました。

稽古中の舞台周りは、演劇塾のキクチさんが転換関係をしっかり管理してくれていることも心強かったです。当日の受付は、KTCの人見さんが引き受けてくださり、文化の仲間の皆さんの力を借り、文化財団も全面的にフォローして頂きました。その点では心配な

いとは言え、カンフェティーのセブンチケットや、モバパスなど気がかりでなりませんでした。

コロナ禍の公演。人気作とはいえ、さすがに制作的には厳しい状況となりました。

いつもなら真っ先にご覧になる人から、「今回はゴメン」と言われたとか、「こんな状況でやるのか」と叱られたとか、悪い話ばかりが飛び込んできます。劇団京浜メンバーの集客も最悪で、「赤字は確定」と言う中、DVD、BDの販売と配信をやることを決め、これで赤字のリカバリーを目論んでいます。

舞台は、6分割された巨大なドーナツが縦横に動き、エネルギー感あふれる歌とダンスもあり、スピーディーで感動的なものとなりました。年配の方には早口で何を言っているかわからない。とか、話の筋がわからなかつ



たと、厳しいご意見も頂きました。しかし、子どもたちにはよく受け止められたようで、1幕からものすごい集中力で観劇してくれ、アンケートもこれまでの倍以上も集まりました。「親と子で楽しむ」舞台としては大きな成功を収めることが出来たと思います。

何より、これだけのことをやってきて、1人の感染者もけが人も出さずに公演を終えたことは奇跡といえます。袖で役者の動きを見ていると、ものすごい集中力で舞台を進めていきます。スタッフ、キャストはじめ、受付を支えてくださった皆さん。素敵な仲間たちとの出会いに心より感謝いたします。

(企画・制作・舞台監督)



緊急報告！

第8回 川崎郷土・市民劇

上演が決まりました

「川崎の煙突男事件」を劇化
ミスター・チムニー！ 天空百三十尺の男 (仮題)

作 和田庸子 / 演出 杉本孝司

日程 2022年5月7日(土)・8日(日) 会場 多摩市民館

5月14日(土)・15日(日) 会場 サンピアンかわさき(労働会館)

主催 川崎郷土・市民劇上演実行委員会

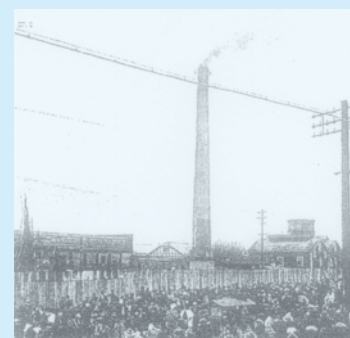
共催 川崎市・川崎市教育委員会・川崎市文化財団

今から91年前の昭和5年、今の川崎競馬場の所にあった富士^{がす}瓦斯紡績の労働争議。解雇や賃下げの争議が……

出演者募集中 下記へ問合せ

城谷護(京浜協同劇団) TEL044-544-3737

川崎市文化財団 TEL044-272-7366



劇団員による劇団員紹介 第 11 回——渡辺そのこさんによる大谷敏行さん紹介

終わったことに振り向かない姿に助けられ

京浜協同劇団 渡辺 そのこ

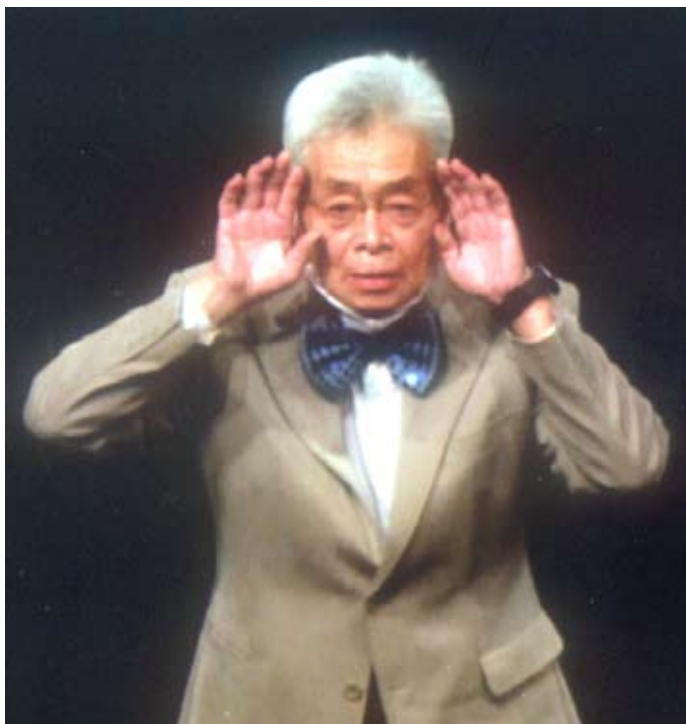


「ピンコーン」おっ！ 今日も来た来た、おっちゃんからの、LINE。

「援助交際では、ありませーん、介護交際です」昨年の公演で漫才の相方として一緒に舞台に立った、おっちゃんこと大谷敏行さん。毎日、茅ヶ崎から東京まで通勤。仕事の合間に川柳を勤いそんでいるそうだ。その作品が私のスマホだけでなく、他の劇団員にも川柳が届いているようだが、特に作品の感想を求めている訳でもないようだ。自分の思い、やりたい事に忠実に突き進む。まわりに振り回されない。大谷さんは、そういうタイプようだ。

大谷さんをよく知らない頃、「ダンディな年配俳優さん」という印象だった。が、知れば知るほど面白い人だ。

坊主せがれの倅が役者に憧れ、鳥取から上京。舞台にも立ち、結婚して家庭を持つが、仕事と接待ゴルフに明け暮れていたとか。



昨年の漫才の中に「タケコプター」「どこかでもドア」などのセリフが出てくるが、大谷さんは「ドラえもん」を知らない！？「目玉おやじ」の独特の言い回しである「キタロー」がわからない！

お子さんが小さい頃、一緒にテレビを見ていなかったとか。ドラえもんや目玉おやじを知らないんじゃ、イメージがわからないだろうと、たまたまその時上映中だった「ドラえもん のび太の新恐竜」を2人で観に行った。映画の中で「タケコプター」のセリフは出てこなかったのが残念。大谷さん、イメージ掴つかめただろうか。私は、まさか50代の私と70代の男性とドラえもんの映画を観ることになるとは、思いがけない展開に、ちょっと楽しくなったけど、大谷さんはどうだったかな？

あんなに自分のペースを崩さない大谷さんも、本番は緊張していたようだ。時々、「あれ？ 大谷さんセリフが出てこないなあ」と横顔を盗み見ると、大谷さんの顎がガクガクしているのが、わかる。

漫才は難しい。芝居より難しいかもしれない。相手との掛け合いと観客との空気成り立つ。毎回違うアクシデントでタジタジになって楽屋に戻ってきた私に、「結構上手くいったんじゃない？」って大谷さん。「エエエ！ そんな訳ないでしょ」と内心思っても、決してグチらない、終わったことに振り向かない姿にとっても助けられた。

もし、また大谷さんと漫才をやる機会があったら、私自身が相手と観客とのやり取りで、もう少し楽しめるんじゃないかなあと思っているが、先に行く大谷さんは違うらしい。

今、落語を習得中らしい。

うん？ おっちゃんからのLINE。

京浜協同劇団 第95回公演

2021年・秋の公演は、「珠玉の2作品」上演です

京浜協同劇団 護柔 一

コロナの状況は先行き不透明のまま、2年目の秋を迎えようとしています。

昨年のバラエティー番組（狂言・漫才・腹話術・ピアノ演奏・大道芸）では、コロナ禍の中ではありましたが、客席からの手拍子や笑いに包まれた公演でした。

蔓延するコロナへの感染防止策を万全にしつつ、今年も上演することを決めました。何よりも62年間支援して下さった観客の皆様に喜んでいただける作品をと、いくつかの候補作品を挙げ、時間をかけて検討した結果「珠玉の名作2作品」に決まりました。公演は、スペース京浜を会場に11月20日から10回の予定です。

1. 飯沢匡の新作狂言「濯ぎ川」

原作は、中世ヨーロッパの笑劇（ファルス）の1演目であった《洗濯桶》です。

翻案した飯沢匡は、新劇台本として書き下ろしたもので、初演は1952年に文学座アトリエでの公演でした。登場するのは、亭主・嫁・姑の3人。

【あらすじ】 毎日、嫁と姑に追い使われる婿養子の男、この日も裏の川へ洗濯に行けと言いつけられます。洗濯途中で、嫁からはやれ蕎麦を打て、姑からは風呂の水を汲めと次々に用事を言いつけられる男。「用事を忘れぬよう、紙に書き付けてくれ」と言い出します。嫁と姑は、朝から晩までの用事の事を次々と紙に書き付けて婿に渡します。婿は、書いて無いことはしなくてもよいと、約束をとり付けます。ほんの、ほんのささやかな反抗でしたが……真面目な婿と嫁・姑が織

りなす、ゆかいな喜劇です。

2. もう一つの作品は、「高瀬舟」

明治の文豪森鷗外の短編、中学3年の国語の教科書にも載っている名作です。

高瀬舟は江戸時代、島流しの刑に処せられた京都の罪人を大阪まで運ぶ舟。そこに乗ってきた喜助と護送役同心羽田庄兵衛の話である。喜助は弟殺しの罪で舟に乗っているのだが、どこか晴れやかで楽しそうだ。

鷗外の原作は短編ながら、同心の庄兵衛と罪人の喜助を表裏一体で描き、それぞれの抱える苦悶をこの世の矛盾として追及しています。鷗外は『高瀬舟縁起』で、自らこの作品の主題は「知足」と「安楽死」であることを語っています。庄兵衛は喜助の行動や考え方、その生きざまに触れることで、この二つの問題に対して強い疑問を抱かされる。それによって、一般人である同心の庄兵衛と、島に送られる罪人である喜助2人の心理的立場が社会的な立ち位置に逆転するというダイナミズムが、この作品の持つ一番の醍醐味と言えるでしょう。「貧困」・「知足」・「安楽死」、大事なメッセージを内包するドラマは現在にも通じるはずで

近年、映像とサウンドに依拠する演劇が主流となっているように思えてなりません。今回は京浜協同劇団が、情緒にあふれ、観る人の心に響く芝居を上演することにしました。

笑いながら愉しめる狂言と心が震える文学作品の2本立て同時上演です。内容の濃い今回の公演にご期待下さい。

京浜協同劇団 第95回公演

珠玉の名作 二本立て

森鷗外・作 高瀬舟／飯沢匡・作 濯ぎ川

演出・護柔一

日程 2021年11月20日（土）～28日（日）（日程表参照）

会場 スペース京浜（京浜協同劇団稽古場）

問合せ 京浜協同劇団 TEL044-511-4951 FAX044-533-6694

HP：<https://www.keihinkyoudougekidan.com>

公演 日程	2021年 11月				
	20 (土)	21 (日)	23 (火・祭)	27 (土)	28 (日)
11時	●	●	●	●	●
15時	●	●	●	●	●

◎文化の仲間通信◎

◆目黒区美術館 包む一日本の伝統パッケージ

日程 2021年7月13日(火)～9月5日(日)

10:00～18:00(入館は17:30まで)

休館日月曜日

料金 一般 800(600)円

大高生・65歳以上 600(500)円 中学生以下 無料

()内は20名以上の団体料金

岡秀行(1905～1995)は、戦前からアートディレクターとして活躍する一方で、木、竹、藁など自然の素材が生かされたパッケージに魅了され、収集・研究を始め、日本人ならではの「美意識」と「心」を見だし、高度経済成長期の日本において消えつつある技術や美があることの啓蒙につとめた。

問合せ 目黒区美術館 TEL: 03-3714-1201

HP: https://mmat.jp/exhibition/index/index.html

◆劇団民藝公演 パレードを待ちながら

日程 9月4日～13日(詳細問合せ)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

後援 カナダ大使館

原作 ジョン・マレル/訳 吉原豊司/演出 田中麻

衣子/出演 吉田陽子・藤巻るも・いまむら小穂・

森田咲子・金井由紀

料金 全席指定・消費税込 一般 6,600円

夜チケット 4,400円 30歳以下 3,300円

高校生以下 1,100円

第2次世界大戦下、男たちが勇んで戦地に行進していったカナダ・カルガリー。銃後を守り奉仕活動に励む5人の女たちは……。

問合せ・申込み

劇団民藝 044-987-7711(月～土10時～18時)

seisaku@gekidanmingei.co.jp

HP: https://www.gekidanmingei.co.jp

◆青年劇場第126回公演 ファクトチェック

日程 9月17日(金)～26日(日)(詳細問合せ)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

作・演出 中津留章仁/出演 葛西和雄・藤木久美子・

高安美子・吉村直・湯本弘美・大嶋恵子 ほか

料金 日時指定・自由席 一般5,200円(当日5,500円)

30歳以下 3,100円(当日3,400円)

中高生シート 1,000円

かつてジャーナリストを志望した記者の顛末! 嘘か真か!? フェイクかフィクションか!? 中津留章仁と青年劇場が、今を問うシリーズ第4作!

問合せ・申込み 青年劇場 TEL03-3352-6922

E-mail: info@seinengekijo.co.jp

HP: https://www.seinengekijo.co.jp/

◆劇団銅鑼創立50周年記念公演第1弾 No.56

泣くな研修医

日程 2022年3月18日(金)～23日(水)(詳細問合せ)

会場 東京芸術劇場シアターウエスト

作 中山祐次郎/脚本 シライケイタ/演出 齊藤

理恵子/出演 横手寿男・鈴木正昭・館野元彦・庄

崎真知子・野内貴之 ほか

問合せ・申込み 劇団銅鑼 TEL03-3937-1101

(平日10:00～18:00) info@gekidandora.com

HP: http://www.gekidandora.com

* * * * *

●文化の仲間定期総会のお知らせ

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間第23回定期総会を2021年9月12日にスペース京浜で開催します。

総会: 13:30～14:50

総会記念講演: 15:00～16:30

全体交流会: 17:00～(状況により)

総会では、この1年間の活動の報告と総括、今後1年間の活動計画などについて話し合います。記念講演では、農業問題に詳しい坂内亮^{ばんないあきら}さんに、一般にまだ十分に知られていない日本の食糧と種苗法の問題をわかりやすくお話していただきます。

記念講演には、会員以外の方でも無料で参加できます。

■文化の仲間ギャラリー■

大谷 敏行^⑬

「厳選」大谷敏行の川柳塾

虎の威を借りる外交 ケセラセラ

二〇二一年四月『朝日新聞』掲載

バラ蒔きで下がる支持率 下支え

二〇二一年一月『赤旗日曜版』掲載

横綱の格式壊す 見苦しさ

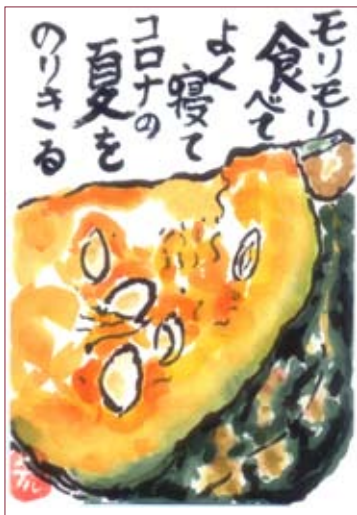
二〇二一年八月『赤旗日曜版合併号』掲載

「国安法」焚書坑儒を想起させ

二〇二一年七月『朝日新聞』掲載

人を呼ぶことさえ出来ぬ 昨日今日

二〇二一年一月『日本海新聞』掲載



絵手紙 竹間テル子